慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワイペルト 理想型と形式理論 (Weippert: Die idealtypische Sinn-und Wesenserfassung und die Denkgebilde der formalen Theorie. Zur Logik des "Idealgypus" und der "rationalen Schemata" Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 1940 Bd. 100. H. 3) : 現代ドイツの方法論争の一節
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.9 (1941. 9) ,p.1160(84)- 1181(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19410901-0084
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410901-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴァイペルト「理想型と形式理論」

(Weippert: Die idealtypische Sinn- und Wesenserfassung und die Denkgebilde der formalen Theorie. Zur Logik des „Idealtypus" und der „rationalen Schemata" Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 1940 Bd. 100. H. 3)

――現代ドイツの方法論爭の一節――

氣賀健三

一

從來の理論經濟學は其方法論に於てマックス・ウェーバーに依つて確立されたと言つても過言ではなからう。ウェーバーの理想型(Idealtypus)論は理論經濟學の論理的性質を規定するものとして多數の學者の承認採用せられる所となり、ウェーバーの認識批判的見地は故に經濟學方法論の根本的態度を決定せるものであつた。限界效用學派から快樂主義(Hedonismus)の色彩を明瞭に拂拭し、之を合理性の原則に當嵌めたのはウェーバーの功績であり、合理主義の市場經濟理論を理想型の概念に高めて其認識價値を規定したのもウェーバーの仕事であつた。

此立場よりして價値判斷は理論の領域に於て否定せられ、理論は唯〻論理的判斷及び技術的判斷を通じて政策に寄與し、且つ之に其限界を指示することができるのみである。理論と歷史との關係に就ては、理論的認識は抽象的なる理想型の形式に於て歷史的現實を理解する道具として解せられた。理想型は現實の中より抽象孤立化され、一般化されたる論理的構成物であるが、それが現實の本質認識に基く限り歷史的知識に依存するものである。が他方に於て構成せられたる理想型は個々の現實の認識に欠くべからざる手段であると解せられたのである。即ち理論は認識の究極の目的でなく、認識に必要なる手段の地位に立つものと考へられた。斯樣な態度は例へばドイツ歷史學派の一部の人々の想定した樣に、理論を以て歷史的研究の最後の到着點と見るのとは、理論の性格の解釋に大な懸隔が在ることを吾々は知るのである。十九世紀後半以來華かに行はれた價値判斷論爭及び經濟法則の歷史的性質に關する疑問はウェーバーの理想型論に依つて一應解決されたもの〻如くであつた。

然るに現在のドイツ學界に於ける新しき風潮は理論と歷史と政策とを一つの認識方法の中に統一しようとする傾向を示して居る。從來の定說であつた如く、理論と政策と歷史とを一應分離して、然る後に之を協力せしむるといふ態度に慊足らぬ所の若き世代の人々は抽象的理論の代りに歷史的現實的理論を要求し、然かも現實的なる認識の中に政策的判斷の根本規準を把握しようとするのである。それ故に彼等に在つては現實の認識を「直觀」に依賴し、然かも現象學的な本質認識を基に置かうとするのである。

新しき立場と古き立場との爭は故に根本に遡つて認識論の性質に至らなければ解決せられない。若し兩者の爭がそれ〻の立場から生れて來た所の經濟法則の是非について鬪はれて居る限り、議論は水かけ論に終始して涯しがないであらう。果して直觀的本質認識が可能であつて、其上に經濟構成體論が成立するかどうか、認識批判的見地は現實認識に不充分であつて、表面的觀察に終始するものであるかどうか、問題は今日に至つても猶ほ解決せられ

たとはいひ難い。

此處に取上げようとする所のゲオルク・ワイペルトの論説はゴットル派の立場からウェーバーの理想型論に根本的な批判を加へて、以て現象學的な經濟本質論の必要を力説するものである。

此紹介文の標題に掲げた所の論文に於て、ワイペルトは初め理想型の意味を規定しようとする。前半に於て彼はウェーバーの說に全く贊成する。ウェーパーは其師リッケルトに據りつゝ、然かも本質認識に注意を向けたが故に、理想型の概念はワイペルトの容認し得る所のものである。

後半に於て、ワイペルトは理想型と合理主義經濟學との比較をする。ウェーバーは合理論主義經濟學を以て一つの理想型概念に當篏るものと見たのであるが、之に對してワイペルトは合理主義が決して本質認識たる理想型に一致するものでなく、現象の形式的把握にすぎず、それは單純に論理的なる形式概念であるといふ。ウェーバーが之を理想型と見誤つたのは、彼の師リッケルトに依據する形式論理主義の爲であると斷定し、正しき認識は今や合理主義から離れて了解に依る本質認識に向はねばならぬとワイペルトは說くのである。而して此本質認識こそは歷史の眞の意味を了解し、同時に政策的規準を把握する所の理論たり得るものと考へられるのである。

次にワイペルトの所論を紹介して之を批評しよう。

二

ワイペルトは先づウェーバーとリッケルトの比較に筆を起す。リッケルトに於ける科學論の特徵は其方法論上の主觀主義に在る。即ち彼に在つては科學の性質を決定するものは、認識の對象の如何に在る（客觀主義）のでなく、認識の目的と其認識の方法とに在る。世界の無限の多樣性を「一般化」して觀察するものは自然科學であり、「個別化」して觀察するものは文化科學である。ウェーバーは此立場を取つて社會科學の方法論を解かうとするのであるが、此處に「合理性」と「非合理性」の問題を通じて圖らずもウェーパーの立場に客觀主義の要素が辷り込むのである。即ち客觀主義の立場に立つドイツ歷史學派は其萬象の特質を歷史的素材の「非合理性」「個別性」「偶然」に求める。ウェーバーは之に反し歷史の特質は對象の「非合理性」に在るのでなく、認識の仕方に在ると考へる。即ち吾々が或る現象の「個性」を完全に說明しようとする時に「非合理性」の問題が何れの領域に於ても現れる。ウェーバーに在つては「非合理性」とは無限の多樣性を其儘に認識することができないといふ所に在るのである。故に歷史學派に取つて「非合理的」なる歷史の世界は、ウェーバーに取つては唯一の「合理的」に理解し得るものとなるのである。人間の行爲の世界の分析は「自然」の領域の了解の不可能なるに較べて遙かによく吾々の合理的追求の欲求を滿たしてくれるのである。

歷史學派が歷史を非合理的なものとしたのは、それが自然的因果性の支配を受けぬものだからであるが、ウェーパーによれば、歷史は認識主體に取つて了解し得るものであるから、「合理的に說明し得る」ものであるのである。

ワイペルトは此處にウェーバーの隱された客觀主義を指摘する。即ちウェーバーが歷史認識をば自然認識に較べて「質的に異なれる滿足」を與へるとか、「特殊の明證」を持つとかいふのは、自然が了解し得ざるものであるに對して、歷史的現象が了解し得るものであるといふ對象の性質の相違から生れたる言葉であるといふのである。ウェーバーは兩種の認識の相違を主觀的な言辭を以て述べて居るが、それは結局對象の性質の相違以外に基くものではあり得ないとワイペルトは推斷する。

さてウェーバーが「了解に依る認識」を說く時、それはリッケルトの「個別化」する認識と全く別の領域に屬し、寧

ろディルタイの「直觀主義」に接近する。併しウェーバーは飽くまで認識批判的見地に立つて、「直觀」の論理的概念構成をこそ問題にするが、直接に「了解論」や現象學的な「解釋學」を說かうとはしない。直觀それ自體は科學以前の認識であり、問題は直觀されたるもの、內的體驗、了解したるものを悟性の作用に依つて構成することに在るのである。

文化科學としての構成はリッケルトに於ては歷史の多樣性を價値づけること、即ち或る文化價値に關係せしめて現實の一面を引出すことである。故に歷史の概念は純粹に形式論理的である。之に對しウェーバーは對象の構成に際して「了解」といふ要素を取入れるから、文化科學の構成は內容的にも制限を受ける。

之に對しリッケルトの「價値關係」は全然形式的、表面的であつて、現實の性質に無頓着であると、ワイペルトは極めつける。彼は次の樣に言ふ。

「リッケルトと雖も流石に、價値を實踐する本質が精神的本質であること、一般的價値が人間的價値であること、而して一般的人間的價値が社會的價値であるといふ事實に對して眼を閉ざすものではない。併し此際當然起つて來る所の「了解性」の問題は正しく取扱はれて居ない。認識の型式は對象の形式に依つて決定されるものではないといふことが、リッケルトには確信となつて居る。「社會的共同體」の「精神的」性質は其故に方法論的な果實を產まないのである」と。（同書二六五頁）

果してリッケルトの論理主義はワイペルトのいふ樣に單純に形式的で表面的觀察に終始し、價値關係の方法は單純に現象を整頓するのみで內部的了解に達して居ないであらうか。

ワイペルトのリッケルト批判は餘り簡單すぎて充分ではない。リッケルトの方法論上の主觀主義を指摘してそれ丈けから認識の形式主義を批難するのは速斷に過ぐるものであつて、リッケルトに對する正しい評價とはいひ得ない。リッケルトの論理主義は現にワイペルトの評言を俟つまでもなく、他の歷史家に依つて其形式主義の故に批判されたのである。之に對してリッケルトは充分自信を以て誤解に答へ、其論理主義が決して素材の性質を無視するものでなく、價値關係的方法は社會的歷史的現象を對象にする時始めてよく文化科學を構成するを得ると說くのである。此點は認識批判的見地一般にとつて重要の所である。次にトレルチの批難に答へたリッケルトの言葉を引用して、彼の論理主義の眞意を傳へよう。即ち曰く

「トレルチは吾々の歷史理論に就て次の如くいふ『決定的なものは常に對象でなくして、其對象をば初めて體驗的現實の連續から分離し、關心に結合せる方法に依つて之を發見し且つ構成する所の關心である』と。之は確に吾々の研究の出發點には當欲る。吾々は論理的に方向づけられたる歷史理論に於て、其論理的構造に於いて方法から對象を發見せねばならなかつた。之こそは吾々の仕事の本來の意味であつた。併しながらそれだからといつて、トレルチの主張する樣に對象が決して素材自體の內的性質から說明せられないとか、研究者の關心が常に決定するといふのは正しくない。吾々は寧ろ方法と歷史の材料の內的性質との兩方を捉へるのであつて、而して吾々が歷史的科學の論理的序說に於て初に方法を置くとしても、之を以て『暴力的』と呼ぶことは許されぬ。最初には勿論吾々に取つて『外からする』方法論的『目的設定』が決定的であり、之に依つて最も一般的なる論理的對立に關して何等疑問の餘地はなくなるのである。此點はトレルチも亦逆はない許りでなく、明かに認める所である。が併し吾々が歷史的中心の概念に向ふや否や、問題は、凡て外からの方法論的目的設定が、中心の歷史的材料の『內的』本質に正確に適するかどうかを示すことに依つてきまることになるのである。」

「……吾々はトレルチの批判に依つて人の想定する如く方法のみに限定することはない。寧ろ忠實に『對象

と方法の相對應すること』の要求を滿さうと努めるのである。

歴史に依る價値關係的、個別化的說明を要求するものが、何故文化的現實、就中其精神的中心であるかは、蓋し吾人の既に述べた所である。之を吾々は次の樣に說明した、即ち歴史家が其素材の特性に最も忠實ならんとするならば、否な科學としての歴史の恐らく決して完全に實現できない論理的理想を顧慮して其素材の特性の要求を滿さんとするならば、歴史家は本質的なるものゝ選擇に際して、歴史的中心即ち當該材料の中に現れる所の人間の文化生活の意味の據つて以て立つ所の其同じ價値に依つて自ら導かれてゆかなければならぬ。

吾々の理論の要點は正にこゝに在る、即ち歴史科學に獨特なる中心の材料は其本質上意味に滿てる文化生活であるが、歴史的に次の樣に記される、該材料に意味を與へる所の價値が同時に概念構成の指導原理の役を引受け、此原理の助を以て歴史科學は其素材を取上げるのであると。其處で明白に判つて來ると思はれるが、最初に『外から』持つて來られた方法論的目的は必然的に歴史的對象の『內的』特性と關係して來るのである。其故に、此點が一度びはつきりすれば、別の順序で初め述べた所の考へを、今となつては次の如く言ひ現はすことができる、普通の狹義の所謂る歴史の對象又は素材は、主として意味に滿ちたる精神的な文化的現實に關係して居るといふ實質的特性を持つものであるから、其說明には價値關係的な個別化的な概念構成を必要とするのであるが、他方に於て意味無關係なる『自然』即ち價値と意味とに無頓着に存立する所の總てのものは、其內的本質上一般化的概念の體系に適するのであると。」（註）

（註）Rickert, H: Die Grenzen der naturwisser schaftlichen Begriffsbildung 5 Aufl. 1929 五三九—五四一頁

之に依つて明なる如く、リッケルトは對象の性質が方法の性質と共に科學の性質を決定する上に重要な役割を演ずることを誤解の餘地のない程明瞭に說くのである。唯々論理主義が彼に在つては第一次的の重要性を持つといふにすぎない。而して此立場は其儘弟子ウェーバーに繼承されて居るといへる。ワイペルトは然るにリッケルトを飽くまで形式主義の一面に押しこみ、ウェーバーをば形式主義から脫却して「意味」ある「社會學的概念」の最初の唱導者たる地位に置かうとする。之こそ「暴力的」解釋と云はなくて何であらうか。

リッケルトが自ら言ふ目的論的概念——個別化的歴史的概念と等しい——に對して、ウェーバーは社會學的概念——理想型は之である——を考へる。ワイペルトに依れば、前者は內容に無關係に構成されるものであるが、後者は之に對して意味ある現實即ち、了解し得る現實を其內容とする。前者は形式的にのみ決定されるが、後者は形式的にも亦實質的にも決定される。

ウェーバーの理想型の概念は社會學的なる現實の「意味」を「一般化」せるものである。それは方法論的に言つて歴史的なるものゝ自然科學化であつて、リッケルトの論理に從へば全く期待されなかつたものでなければならぬ。正に之はウェーバーの獨特な說明であり、其師リッケルトには見られない。ワイペルトに依れば、ウェーバーの社會學的內容に對する注意が此の新しき概念を產んだのであつて、之はウェーバーの獨自の功績に歸せられるものである。

リッケルトとウェーバーは此點に於て果して和解し難きものであらうか。吾人はさうは思はない。

一般化する所の社會學、即ち人間の社會生活に關する學問が自然科學として可能であるかどうかといふ問題に對して、リッケルトは敢て抗議を申込まうとはせぬ。斯かる學問の成立はリッケルトの科學規定の方法に少しも抵觸するものではない。但し、斯樣な社會學が、如何にして人間の生活は一回限りの個別的な經過に於て現實に構成せ

られたのかといふことを說明し得るかどうかといふ點に付ては疑はざるを得ないのである。

蓋し、社會が比較的に高度の歷史的なるものであるとすれば、社會學が自然科學として完全なものに近附けば近附く程、社會生活の中から社會學の概念の中へ這入つてゆくものは少くなる筈である。其故に方法論的に言つて、丁度自然科學的生物學と歷史的生物學があると同じ樣に、人間の社會生活の研究に自然科學的一般化的方法もあれば、同時に歷史的個別化的方法も在り得るのである。但し「自然科學的な歷史」は不可能である、社會學は一般化的科學として決して歷史の地位に在り得るものではない。此點は特にリッケルトの强調する所である。ウェーバーの理想型は然らば一體如何に解すべきかといへば、理想型は歷史的認識そのものといふより、寧ろ歷史的認識に達する手段であるといふウェーバー自身の言葉で此疑問は解決されるであらう。（註）

（註）Rickert, H. 同書二六二―三頁參照

ウェーバーがリッケルトから離れたといふのは、故にワイペルトの强引な獨斷に基づくものであつて、兩者を正しく認識せるものではない。

ウェーバーの理想型概念がリッケルトに見られざるものであることは正に其の通りであるけれども、それがリッケルトから全く離れて成立せるものと考へるのは正しくないと思はれる。

理想型概念の核心を爲すものは、個々の社會的現實の中に見出される「意味」である。此共通の「意味」を一般化せるものが即ち理想型である。ワイペルトは、理想型が「價値實現」の領域に在り、リッケルトの歷史概念が「價値關係」といふ形式的領域に止まると述べて居る。此區別も亦吾人の見る所に據ればワイペルトの偏見に基くものである。價値關係といふことは、リッケルトに在つては人間の歷史的生活を對象として初めて意味を持つのであり。然も之に依つてのみ人間の生活の本質が把握され得るのである。それはこゝに言ふ「價値實現」と何等實質的差異を持てる言葉ではない。

さて理想型は具體的現實の認識を直接の目的とするものではなく、現實の「意味」を故意に誇張し、意味の純粹を妨げる諸々の要素を拂ひ落し、「論理的完璧」さを備へた所の思惟構成體である。それは故に決して現實を模寫せるものでもなく、現實の中に現れる平均又は標準型でもなく、謂はゞ思惟の空想的產物に相當する。併し理想型は空虛な想像であつてはならない。が理想型は先驗的に科學的に有益な概念たる運命を約束されて居るのでもない。理想型の科學的眞僞は一つにそれが認識手段として役に立つかどうかに懸つて居るのである。ウェーバーは之に依つてリッケルトの「文化史」に對して「文化理論」（社會學）を建設し、以て歷史の了解の手段たらしめんことを企だてたのである。

ワイペルトは然るにウェーバーの斯樣に論理的に謙讓な態度に不滿を覺える。彼は理想型の構成には「直觀」が必要であると說く、ウェーバーが理想型構成の爲に Steigerung 又は Stilisierung, geschulte Phantasie などといふ言葉を使ふ時、それは「直觀」の性質を持つものでなければならぬとワイペルトはいふのである。理想型の構成に際して行はれる所の抽象、孤立化それから一般化はウェーバーの言葉に依れば、內的に矛盾の無いこと、型の純粹さを眼目とするものである。ワイペルトは之が直觀の働きに依つてのみ可能であると考へる。

吾々はワイペルトの斯かる考へ方の中に彼の現象學的本質論の立場を見ることができる。彼は理想型の概念の中に現實の本質を存在するものとして把握しようとするのである。理想型は一つの認識手段であると同時に現象に內在的な本質其物の直接認識でなければならぬと想定するのである。然るにウェーバーに在つては、直觀は問題にな

らない。リッケルトの流を受けつぐ嚴格な論理主義の性格はウェーバーの中にも生きて居るのであつて、問題は直觀的な了解でなくして、斯く直觀されたるものゝ悟性的把握に在るのである。故にワイペルトは理想型の概念にウェーバーと全く違つた立場から全く別の意味を附加へようとして居ると云はなければならぬ。

さてウェーバーの理想型は、其論理的抽象の操作に依つて、極度に歴史性を抽象され、一般化されたる「純粋社會學」から歴史性の極めて濃い所の「歴史學」に至るまで抽象の程度を異にして存在する。一つの理想型は、それより高度に抽象化されたる理想型を認識手段として解明される「歴史的概念」であり、それより下位の理想型―歴史的概念―に對しては、自ら認識手段たる役目を爲すのである。歴史學は社會學を前提とする。個別的、文化的現象は理想型概念を用ひてのみ分析されるのである。

ワイペルトに依れは、リッケルトの歴史概念は本質把握に適さぬものであり、表面的な因果分析の域を出ない。リッケルトが自らの方法を「目的論的」といふ場合にも、それは「了解的」觀察方法、即ちゴットルの謂はゆる「了解に依る因果づけ」ではない。然るにウェーバーの理想型は「了解」を目指して然かも一般化的なる社會學的概念であつて、此處に歴史學と社會學とは明瞭に區別されることになるといふ。

ウェーバーの社會學的概念の中でも最も純粋に抽象され一般化されたるものは、純粋の理想型であり、其内容は最早や歴史的個體ではなくして、唯々「意味妥當性」「本質」のみを純粋に浮上らせたものになる。對象其自體は一切の歴史的具體性を喪失せる人間的なるもの一般に含まれる「意味」に向けられることになるのである。人間の社會生活の根本形式にまで其對象は擴げられて來るのである。

斯くの如き本質把握を目指す所の純粋社會學の概念は、ワイペルトの言葉に依れば全然「現象學的概念」である。

併し吾々は此本質把握の方法がウェーバーとワイペルトとでは根本的に相違することに注意せねばならぬ。

三

ワイペルトは其論文の前半に於て以上の如く理想型概念を説明し、ウェーバーを支持しリッケルトを排するのであるが、其論文の後半に於ては、ウェーバーが抽象的理論經濟學を理想型と見たことを批難するのである。即ち理想型は其本質の性質からいつて意味把握でなければならぬのに、抽象的經濟學の合理主義は形式的法則に過ぎず、現象の意味を把握するものでないといふのである。理想型の法則は「意味法則」、「本質法則」又は「構成的法則」であるべきであるが、合理的法則は單なる形式論理的法則であるとワイペルトは見るのである。

ワイペルトに依れば、合理的法則に在る所の理想化は、現象本來の「意味」の理想化でなくして、合理性の理想化である。「人は一つの歴史現象に關し幾多の別々の理想型を構成することができる。が併し其際大切なことは、此等の理想型が總て等しい意味妥當性の法則の下に立つてゐるといふことである。然るに同一の現象に照して構成されたる理想型と合理的公式とは相互間に意味の合致がない。」（註）

（註）Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 1940 Bd. 100 二九一頁

理想型は飽くまで現實から直接に導き出されたる意味を含むものであるが故に、それは現實の意味を持てる概念であり、眞の抽象である。然るに合理的法則は、現實から全く眼をそらし純粋に合理的に作られたるものであるから、それは假定的觀察であり、擬制である。かゝる合理的觀察方法は、現象の了解的觀察と何等共通のものを持つて居らぬ。

理想型の中には了實より了解されたる意味が壓縮されて居るのであるが、合理的公式、所謂る模型の中に在つては、之と正反對に全く意味と無關係のものが構成されるのである。ゴットルの術語を利用すれば、理想型では現實が「會得」されるが、合理的公式では現實が合理主義的に理解されるのである。（註）

（註）Weippert: 同書二九五頁參照

例へば高度資本主義といふ理想型に於ては資本家的精神の支配、資本家的理念の下に立つ經濟の姿が明にされる。資本的精神、即ち資本家的性嚮が經濟現象を規制する原則である。

之に對し自由交易經濟といふ模型に在つては事情は全く異る。經濟に取つて資本家的精神は何を意味するかとか、資本家的意味構造や資本家的意味必然とは何かに就て全然顧みる所なく、具體的な資本家的經濟から一定の現象が與件として取出され、營利的經濟的動機の支配するといふ前提の下に合理主義の模型が作られるのである。

合理主義經濟學に對するワイペルトの判斷は斯くの如きものであるが、さればといつて彼は合理的法則の意味を全然否定しようとするものではない。合理的法則は一定の經濟的理想型の內部に於て表面的な現象の說明に役立つと說かれる。

又實際の問題として合理主義の原則は資本主義經濟組織に於て作用する經濟性嚮と合一する所を持つて居るのである。然るが故に此兩者は混同される危險があるのであるが、併しながら合理的に構成されたる「模型」と資本主義の理想型とを同一視するのは正しくない。資本家的性嚮の內には合理主義以上のものが含まれて居る。

斯くの如き所論からワイペルトが引出す所の結論は次の如くである。

合理的法則を以ては決して經濟の本質を了解することはできない。經濟の本質は經濟の「本體論」に依つてのみ之を把握することができる。最も根本的なる理想型概念は時間と空間を超越して妥當する所の經濟の根本的構造を究めるものであり、ゴットルの言ふ「基礎理論」やエグナーの「本質論」（註）は即ち之である。

（註）Egner, E: Blüte und Verfall der Wirtschaft 1936

合理主義に對する同樣の批難はゾムバルトに依つても亦發せられる所である。ゾムバルトは之を將棋に例へて說明する。即ち詰將棋の問題は條件が與へられて居つて之を最も合理的に詰めるにはどうすればよいかといふことである。合理主義の法則はホモ、エコノミカス——完全に合理的に行動する人間——が與へられたる前提の下に行動することを豫定するものである。斯くの如き擬制法則は經驗的現實から隔ること遠いものがある。此法則は唯其內容が如何に現實に接近するかに從つて意味を持つに過ぎないのである。（註）

（註）Sombart: Die drei Nationalökonomie 1930 二五八頁以下參照

四

ホモ・エコノミカスの理論經濟學は果して單なる形式論理學の一種に過ぎないものであらうか。そこには何等の「意味」の究明が行はれて居らぬのであらうか。經濟の本質は少しも了解されて居らぬであらうか。

先づ第一に答へられることは、理論經濟學は現象學的な意味の直觀、了解を行ふものではないといふことである。直觀主義はリッケルトもウェーバーも共に極力排斥する所である。それは本體論を排斥する認識論の見地に立つ以上當然のことである。直觀主義は問題を形而上學の世界へ持込むことに外ならない。リッケルト、ウェーバーの立場からすれば直觀されるもの自體は科學以前の領域に在つて、それは直接に認識の對象ではない。問題は認識の構

成の仕方に在るのであつて、其處に文化科學に於ける價値關係が意味を持つのである。歴史的なる人間社會生活の現象は之を一面的に價値づけることに依つて、初めて其現象の本質を了解し得るのである。了解は直觀的に行はれるのでなく、概念構成を通じて行はれる。其故にウェーバーの理想型に於ても了解は決して現象學的な「解釋學」として解せらるべきものでなく、寧ろ直觀主義者の所謂る「把捉」（Begreifen）と稱すべきものに屬する。

價値關係的な認識は決して直觀主義の了解ではないが、それは又單に表面的、形式的なる理由を以て批難さるべきものではない。その次第は曩に述べたリッケルトの引用文からも類推し得るであらう。直觀主義の立場をウェーバーの理想型概念に當嵌めようとする試みは初めから無理であつたといはなければならぬ。

更に又理想型理論は飽くまで歴史的現實認識の手段であつて、究極の目的は、斯く構成されたる理論を以て個別的なる歴史現象を理解することに在るのである。其故に最も理想化されたる純粋理想型を直觀的な經濟本質論に等しきものたらしめようとするのは理想型の本質を見誤れる試みである。個別的なるものゝ本質認識に必要な手段として歴史的對象を一般化し抽象して見直さうとするとき、それ自然個別的なるものゝ意味を全く形式的な假定判斷性の姿に於て把握することになるであらう。理想型に含まれる所の歴史的現象の本質的意味は故に意味其ものとして把握される代りに、當該現象の形式的な擬制として之を解せられても少しも不都合ではないのではないか。然かも斯る擬制法則は決して表面的な形式原理たるに止まるものでなく、現實に存する所の意味の實現の程度を反映する限り、本質認識たる可能性を持つものである。

理論が理想型として一般化、抽象化（孤立化）されたるものである限り、それは單に主觀的なる體驗の領域から了解せられたるものを抜き出して科學の一般的妥當性の上に置くこと――之を因果の範疇に於て表現すること――が其任務であり、抽象的理論の正しさは之が現實の説明に於て有用であるかないかに依つて驗せられるのである。

其故に合理主義の經濟學が合理的法則を形式的な原則として尊重するのを、單純に形式的であると見るべきではない。吾々は先づ理論經濟學に於ける研究の對象が人間の社會生活一般に及ぶものでなく、其一面たる經濟生活に限られるものであることを注意せねばならぬ。それは人間の欲求の世界に對して物質的なる手段の領域を人間の行爲が如何に適應せしむるかを觀察するものである。此世界に於て人間の行動の合理性又はホモ・エコノミカスの想定は特別の意味を持つて來る。即ち特に經濟的なる意味を持つのである。それは形式的なる範疇であると同時に、現實に根差す經濟の本質的なるものである。「自由交易經濟」といふ歴史的なる理想型に於て、合理的原則は、買手は最も安く賣手は最も高い方へ向ふ、交換當事者は交換的利益を目盛にして行動するといふ營利的原則の形をとつて現れるであらう。それは又資本主義經濟に於ては資本家的なる營利精神となり。資本家的生産の根本的な經濟性の響を示すのである。斯くの如き意味に於て經濟現象をゾムバルトの所謂る「舞臺裏から」（註）了解することは、理想型を通じて、合理主義の理論經濟學に依つて可能となるのである。古典學派やオーストリア學派の經濟理論は決して自然科學的なる「整序」經濟學でなく、了解する經濟學である。換言すればゾムバルトの言ふ「整序經濟學」は了解の經濟學であり得る。

（註）Sombart　同書　一九七頁參照

ゾムバルトの言ふ了解は然るに決してワイベルトやザリンの言ふ直觀と等しいものでないことは注意に値する。ザリンが直觀的と合理的とを對立させたことに就て彼は遺憾の意を表し、對象が自然であつても將又精神であつても、總て有意義なる思惟は「直觀的」であり、同時に總て明瞭なる思惟は「合理的」であると主張する。又マックス・ウ

ヰーバーの言葉に贊成して「直觀を欲するものは映畫館へ行け」といふ辛辣な警句を引用して次の樣にいふ。

「ウェーバーの言葉は「直觀」の概念を誤つて用ひるもの、特に認識をば「純直觀」と考へるものに向けて發せられたものである、斯樣な誤用をすることはできぬし又してはならぬ。吾々は寧ろ科學的認識が直觀の外に常に「理性」(Ratio)を必要とすることに注意してゐなければならぬ。「理性」は「直觀されたるもの」の範疇的把握を整へるものであり、之なくしては人は知識を明示することができず、言語に依つて之を傳達することさへできない。而して此範疇的把握、此概念體系構成は當然科學的認識の爾餘の形式の孰れとも正に等しく必然的に「了解」に屬するものである」と。（註）

（註）Sombart 同書　二〇三頁

吾々は敢てゴットルやザリンのいふ所の了解經濟學が不可能であることを論證しようと思ふものではないが、ソムバルトの所謂る「整序經濟學」がマックス・ウェーバーの理想型理論と等しく「了解」の一つの方法であることを主張したいのである。理論經濟學の市場理論に於て、個々の現象は全體との關聯に於て說かれ、表面的ならざる經濟構造と經濟行爲とは同じ領域に於て取上げられ、いはゞ「舞臺裏から」經濟現象が「了解」されるのである。經濟現象の「意味」は之に依つて說かれ、經濟現象の具體的、現實的認識は之を通じて可能になるのである。

抽象的理論が現實から遠ざかることの甚しいものであることはいふまでもない。それは抽象、一般化の方法を取る以上必然の結果である。ゾムバルトやワイベルトの本質認識と雖も此點に於て何等變る所はない。論理的操作の結果作られたる模型といふ意味で之を擬制と呼ぶことは差支へないが、それが經驗的現實から全く離れて宙に浮いて居るものだといふのならば間違ひである。合理主義の諸法則は明かに現實社會の人間の行動から導き出されたものである。それ故に此等の法則は單なる形式的原理ではない。抽象されたる認識手段として形式的であるが、同時にそれは現象の意味を內に含むものである。

ゾムバルトにしてもゴットルにしても、理論經濟學の法則が專ら量的なものに限られて居ることを指摘する。而してそれは量的なるが故に現象の意味關係を了解せしむるものでないといはうとするのである。

經濟理論の量的な法則が其自體として形式的なものであることは確かである。が併し斯樣な法則は何等かの外面的規準に依つて作製されたる統計的な法則とは違ふ、其法則を定立せる背後には經濟現象の社會的意味が潛んで居る。人が若し此背後の意味を忘れて、其形式的な表現たる量的關係のみを論ずるならば、その態度は確に表面的である。

ゾムバルトは合理的原則の外に猶ほ二種類の從來の經濟法則の種類を擧げ、何れも無意味は法則であるとして之を輕蔑する。（註）其一つは量的又は數學的法則であり、他の一つは構造法則である。前者は例へば賃銀基金說の法則、マルクスの餘剩價値法則、貨幣數量說、セイの販路說、ケネーの經濟表、リカードーの地代法則、ベームの生產迂廻說等々である。此等の法則はゾムバルトに言はせれば、部分は全體より小いといふ平凡な眞理を物語るもので、何等社會現象の意味解明に貢獻する所はないのである。即ち賃銀基金說は、若し賃銀基金が一定であるならば、賃銀の總額は之を超へることはできない。一方に於て賃銀が騰るならば、他方に於てそれは下るに相違ないといふことである。貨幣數量說は、若し物價が流通する貨幣の量に依存するとすれば、商品量が不變で、貨幣量が增す時、物價は騰貴するといふことである。

（註）Sombart　同書　二五三頁以下

ゾムバルトが此等の法則をば何れも皆假設的判斷の形に於て表現し而も之に捉はれて居ることは、其故意に基くものか、無意識に基くものか知らぬが、此等法則の定立の眞の意味を理解して居らぬ證據である。斯樣な形式的な法則の表現は畢竟するに表現形式であつて、法則の意味は其形式の背後にある意味關係を指摘するものに外ならぬ。即ちアドルフ・レーヴェが正しく指摘して居る如く、賃銀基金說の主張者の眞意は―其說の當否は此處に問はないが――賃銀基金をば一定の大さであると想定し、其以上其假定を追求しないで賃銀騰貴の限界を定めようとしたのではなく、基金が一定であるといふ事實を籠囁的に考へて此問題を確立したのである。セイの販路說にしても同樣であつて、それは「若し各商品が他の商品の購買に用ひられるならば、……」といふ假定判斷でなく、「各商品は他の商品の購買に用ひられるが故に、販路停滯は起り得ない」といふのである。此法則はセイの交換市場の現象の研究の結果得られたる實在形式であつて、市場の合理的なる公式の中に求められ、見出されるものである。單に形式的ならざるマルクスの經濟學の諸法則は、抽象的・合理的理論經濟學の好き見本である。ゾムバルトが此等を以て部分―總計の先驗的關係を示すに過ぎぬと考へるのであるが、實際は市場の經驗的對象を內容に取入れたるものであるのである。(註)

(註) Adolf Löwe: Über den Sinn und die Grenzen verstehender Nationalökonomie, Weltwirtschaftliches Archiv 36. Bd. Heft II Literatur 「五九頁

ゾムバルトが呼んで構造法則と爲す所のものも亦同樣の彼の誤解の爲に歪曲される。構造法則とは例へば「利潤追求は資本家的經濟組織の必然的構成要素であるとか、資本主義は無產階級を增加すること無くして成長するを得ない」等々である。(註)此等の法則はゾムバルトに依れば、既に結論が最初から豫定されて居るのであつて、謂はゞ初め中へ入れて置いたものを後から引出すといふ樣なトオトロギーに過ぎない。

(註) Sombart: 前揭書二五七頁

資本主義的生產とプロレタリアートとの關係を說明することは決して同義語の反覆ではなく、實際的な觀察の結果として得られたる全體と部分との關係を表現したものである。資本家的經濟組織に於て利潤追求が原則になるといふのは、一部分法則たるよりも寧ろ資本主義經濟の根本的な意味を把握せる命題と解すべきである。

斯樣に考へるならば、ゾムバルトの所謂る整序經濟學は實は了解する經濟學であるといふことができるであらう。ゾムバルトの說く「了解經濟學」とは然らば如何なるものであらうか。ゴットルの生活理論やザリンの直觀理論と共に經濟現象の具體的な取扱ひ方に就ては、それは未だ何も吾々に示す所はないのである。

五

ワイペルトはウェーバーの理想型をば現象學的に解釋することに依つて認識批判的見地と全く別の立場に立つ經濟本質論を要求する。

了解しうる所の社會現象を極度に一般化し最も理想化されたる本質認識に依つて、ワイペルトの望む所のものは、「超歷史的 超時間的なる經濟の理論――但し其本質上人間的存在の歷史性を絕へず觀察する限り等しく歷史的であるが――であり、それはあらゆる國民、あらゆる時代の經濟に作用する所の構造關係を發見することである。」(註)

ワイペルトに依れば、合理主義の認識は「正しさとしての價値」(Richtigkeitswert) しか持たぬものであるが、本質法則は「眞理としての價値」(Wahrheitswert) を持つものである。直觀が其儘直ちに客觀的なる本質の妥當性を主張

し得るならば、ワイペルトの言葉は正しいが、直觀主義に依らざる限り、眞理としての價値は、同時に正しさとしての價値に依つて裏付けられ、又正しさとしての價値は眞理としての價値たる內容を持つことに依つてのみ眞の認識價値があるものと言ふべきである。リッケルト、ウェーバー流の認識から眞理としての價値を奪ひ去ることは甚だしい曲解であるが、他方又本質の直觀認識が正しさとしての價値を顧慮することなくして濟むかどうか疑問があるのではなからうか。

ワイペルトに依れば、經濟の本質法則は經濟本質論即ち一切の歷史的特殊性から抽象されたる根本的な理想型に依つて最後的な意味を持つのである。本質論とは故に「經濟本質論」に外ならない。經濟の本質論の意義に就てワイペルトは次の如くいふ

「經濟の本質論を以てして初めて、どの程度まで合理主義の公式が經濟の構造必然性に從ひ、經濟的存在の條件に從つて構成されるかを示し得る地位に在る。歷史的な意味現實性を持つた理想型は結局其型史的眞理に照して一つの公式を整頓することができるのであつて、其本質的な眞理に照して之を整頓することができない。總ての經濟認識は本質論に依りて其基礎を得る。」

「……吾々は猶ほ經濟の本質論に依つて（歷史的理論のみならず）政策的理論に對する支持點をも確立するのである。此事は本質論の眞理性から當然生じて來る。吾々が擬制法則にかゝはつて居る限り政策的理論の得られないことは更に證明する迄もないことである。單に思惟的の正しさは決して――特に人間的な意味に解した――「存在の正しさ」とか「生活の正しさ」たることを要求し得るものではない。併し吾々が眞理を持つ場合、或る認識に眞理性を承認する場合、そこには亦存在の正しさが一定せられる。政策なるものは、存在の正しさに從ふ、即ち人間生活の法則に依つて行動するより以外に一層高い目的を立てることはできぬからして、存在の正しさの理論は同時に政策的理論である、經濟の存在に關して眞實に其眞理を完成することができた曉に、人は倫理的・政治的なるものゝ組込まれて居る所の一つの知識に突當る。經濟的存在の構造を明にするに際しては、經濟的出來事を擔當する所の生活單位を無視することを許されない。生活單位とは即ち生活共同體として以外に考へることはできない。經濟の本質論と共に人間と其「法則」が觀察の中心に出て來る。經濟の本質論は人性學に追ひ向けられる」（註）と。

（註）　Zt. f. d. g. St. 1940. 100. Bd. 三〇七頁

此處に引用したワイペルトの結論は如何にも正しい。了解經濟學は此處まで遡つて初めて歷史と理論と政策の統一を企てる資格がある。ワイペルトの論說は「生活經濟學」「了解經濟學」が企てる革新の根本を明確にした點で大切な功績が認められる。經濟學が超歷史的な本質論を求めようとするならば、それは直觀主義の上に立つて本體論を取上げるより外に道はない。其途はリッケルト、ウェーバーの立場からは到底踏入ることのできない、否な禁斷の途でさへある。蓋しそれが經驗科學の領域を逸脫するのは當然だからである。本體論的な人性學を取扱つて人間生活の原理を究明することができ、それから經濟の構造を明かにし、それから現實の歷史的經濟現象の了解へ達する途は併し未だ開拓されたとはいえない。吾々は此等の努力に大いに敬意を表し、其革新的な企ての成功を俟つものであるが、同時に、リッケルト・ウェーバーの途が現實の了解に決して不充分なものでないことを信ずるものである。